

知求会ニュース

2016年12月

第60号

◎ 博士後期課程 博士号取得、おめでとうございます！

スバゴジョエワ アセリ(国際学研究専攻・7期生)さんが、2016年9月30日(金曜日)に今春授与された趙 無忌さん、三成清香さんらに続いて第18号の博士号学位を授与されました。

これまでの国際学部・国際学研究科(修士課程および博士前期課程)出身者の学位取得者は、博士(国際文化)(東北大学)・博士(文学)(名古屋大学) / (筑波大学) / (東北大学) 3名・博士(人文科学)(お茶の水女子大学)・博士(人文学)(パリ東大学)・博士(芸術学)(筑波大学)・博士(社会学)(一橋大学)・博士(農学)(東京農工大学連合大学院) 2名・博士(国際学)(宇都宮大学) 12名・博士(経済学)(名古屋市立大学)・博士(観光経営学)(慶熙大学校)・博士(人間・環境学)(京都大学)・博士(学術)(杏林大学) / (筑波大学) 2名の計27名です。

◎ 博士前期課程、修了おめでとうございます！

2016(平成27)年9月30日(金曜日)午前10時10分から峰ヶ丘講堂にて、2016年度学位記授与式が開催されました。

今回の修了者は、国際交流研究専攻第9期生の小林ひとみさん、国際交流研究専攻第11期生のハルチュニヤン カリネさん、国際社会研究専攻第16期生の沢部靖さんの3名でした。

◎ 教職員人事異動

大橋 敦 講師

国際文化研究交流講座所属の大橋先生が、9月30日をもって契約満了につき退職されました。2年半の短い期間でしたが、松井貴子先生の代用教員として大いに重責を全うされました。新たな赴任地にて、今後のご活躍を祈念しています。

奈良橋 真さん

国際学部事務部総務係長の奈良橋さんが10月1日付で学務部修学支援課に異動されました。奈良橋さんは国際学部には2年3か月間在籍されていました。裏方として国際学研究科・国際学部の事務を円滑に、かつ前進的に采配されてこられました。在籍期間中は本当にお疲れ様でした。後任には、留学生・国際交流課から飯島 透さんが着任されました。

◎ 9月入試合格結果

国際社会研究専攻 一般 0名・社会人 0名・外国人 2名 計2名

国際文化研究専攻 一般 2名・社会人 0名・外国人 1名 計3名
国際交流研究専攻 一般 1名・社会人 1名・外国人 4名・
国際交流・国際貢献活動経験者 0名 計6名 合計11名

◎ 平成28年度第1回各学部等同窓会連絡協議会報告

2016(平成28)年10月3日(月)午後4時から、宇都宮大学本部棟3階第2会議室にて、平成28年度第1回各学部等同窓会連絡協議会が開催されました。出席者は石田朋靖学長・藤井佐知子理事・茅野甚治郎理事・池田宰理事・久保進理事・田巻松雄 国際学部長・伊東明彦 教育学部長・阿山みよし 工学研究科長・吉澤史昭 農学部評議員の大学側9名と事務局担当者5名、土屋伸夫 国際学研究科同窓会会長・松本展壽 教育学部同窓会会長・小林哲夫 同副会長・増渕茂泰 同副会長・阿久津嘉子 同事務局長・清水由行 工学部同窓会会長・上澤和彦 同副会長・和賀井睦夫 農学部峰ヶ丘同窓会会長・竹永博 同副会長の同窓会側9名でした。議事内容は、協議事項として、宇都宮大学3C基金の創設について。検討事項として、1. 各学部同窓会の活動報告等について、2. 大学に対する要望等について、3. その他、そして大学の現状報告等がなされました。

◎ 掲載記事紹介

1. UUnow 第41号(平成28年11月20日発行)10-11面に、研究 keyword コーナーで「ロシア」「文学・文化」「香水」と題して、[大野斉子](#)先生の記事が掲載されました。
2. 下野新聞 朝刊(平成28年4月29日発行)26面に、「イスラム教徒ツアー誘客へ 佐野・むらおこし実行委」と題して、「2家族招き試験企画 戒律、習慣学び9月本番」の内容で宇都宮大ハラール研究会の[友松篤信](#)先生の記事が掲載されました。
3. 下野新聞 朝刊(平成28年6月33日発行)4面に、「安保と憲法巡り 識者が意見交換 宇都宮大で集会」と題して、[清水奈名子](#)先生のコメントが掲載されました。

◎ 国際学部だより

1. 下野新聞 朝刊(平成28年3月10日発行)21面に、東日本大震災5年 3.11から「宿題 転換期、活動の模索続く」の中で、[伏田真季](#)さん(国際学部2年)のコメントが掲載されました。
2. 下野新聞 朝刊(平成28年3月26日発行)3面に、「世界の社会問題と向き合う上映会 あす、宇大生グループ」と題して、[三上果南子](#)さん(国際学部3年)のコメントが掲載されました。
3. 下野新聞 朝刊(平成28年5月20日発行)4面に、「心つなごう 熊本地震」と題して、「被災者の声に耳傾け 宇大学生が活動報告会」の内容で[緑川沙智](#)さん(国際学部4年)の記事が掲載されました。
4. 下野新聞 朝刊(平成28年6月28日発行)3面に、「とちぎ参院選 18歳から1票」と題して、「宇都宮大に初の期日前投票所 学生が投票、立会人も 争点語るカフェも開設」の

中で**芹沢由佳**さん・**瓦井来実**さん・**菊池紗桜里**さん(国際学部3年)らのコメントが掲載されました。

5. 下野新聞 朝刊(平成28年8月5日)4面に、「宇大・インターンシップ 来月までに学生が改善策」と題して、「企業の課題 解決策提案」の内容で**岩井俊宗**さん(国際学部第7期卒業生)の記事が掲載されました。
6. 読売新聞 朝刊(平成28年8月26日発行)28面に、「宇大 国際学部2学科統合へ」と題して、「グローバル人材育成目指す」の内容で**国際学部**の記事が掲載されました。
7. 「悠悠手にしてほしい一冊」(宇都宮大学附属図書館発行 第26号 平成28年10月)に、**田巻松雄**先生の推薦書が掲載されています。
現代ヨーロッパと移民問題の原点：宮島喬 著 明石書店 2016
8. 「悠悠手にしてほしい一冊」(宇都宮大学附属図書館発行 第27号 平成28年12月)に**湯澤伸夫**先生の推薦書が掲載されています。
103歳になってわかったこと：篠田桃紅 著 幻冬舎 20xx

※「悠悠手にしてほしい一冊」は宇都宮大学附属図書館の学術情報リポジトリから見られます。(<https://uuair.lib.utsunomiya-u.ac.jp/dspace/handle/10241/8839>)

◎ 放送大学面接授業 (東京文京学習センター主催)

1. 国際協力論 2017年1月7日(土)・8日(日)1時限～4時限
友松篤信先生(国際学部名誉教授)・田中由美子さん・石田洋子さん・**高橋豊**さん(国際学研究科修士課程国際社会研究専攻第1期生)

○ 刊行案内

1. **藤田和子**先生らが、2016(平成28)年10月30日に『新自由主義下のアジア』(ミネルヴァ書房)を編著で刊行しました。(<http://www.minervashobo.co.jp/book/b239763.html>)

宇都宮大学第4回ホームカミングデー特集号

知求会ニュース第60号は、宇都宮大学第4回ホームカミングデー開催に併せて**田巻松雄**国際学部長兼国際学研究科長と**高橋豊**さん(国際学研究科 国際社会研究専攻 第1期生)に寄稿をお願いしました。

特別寄稿 1

「第4回目のホームカミングデーを開催して」

国際学部長 **田巻 松雄**

11月19日に第4回目のホームカミングデーが開催されました。2年前の第3回目は学部発足20周年記念事業として実施しましたが、今回は、来年4月から国際学部は現行の国際社会学科・国際文化学科の2学科体制から国際学科の1学科体制へ改組することが決まったことを受け、「新国際学部は何を目指すのか」と題するミニシンポジウムを行いました。

最初に田巻が挨拶をして、そのあと、6名のパネリストから新しい学部への期待や意見を発してもらいました。15分程度の挨拶（プログラムでは基調講演となっていたが）で何を話したのか、データや資料は作らなかったこともあり、正確に思い出せなくて、ゴメンナサイ。

1つは、今年の寂しいニュースとして、なんと40年間少年ジャンプに掲載されてきた「こち亀」がとうとう終わってしまったことに触れました。自分は大の「こち亀」ファンでありました。40年間一度の休みもなく、日本や世界の変化に対する鋭い観察力を駆使して魅力的な作品を描き続けた秋山治さんはホントに凄いです。「こち亀」を読んだことがない！？人はいないと思いますが、万が一いたら、声をかけてください。相数の単行本を持っていますので・・・「国際学部も凄いです」と言われたい。

もう1つ、「国際学部は面白い」ことを声高く発しました。このことを改めて認識したのは、2年前に学部発足記念事業として『世界を見るための38講』を刊行した時です。国際学部と留学生・国際交流センターの38名のエッセーと学部が組織的に取り組んできたプロジェクトを紹介する6つのコラムから構成されています。編集は田口卓臣・松尾昌樹・松村史紀の3氏が中心におこないましたが、自分も編集に加わり、すべての原稿に目を通しました。最初の原稿から編者の厳しいコメントを経て完成原稿に至るまでの過程も見ました。これらの作業を通じて強く感じたことが「国際学部は面白い」です。これは、実に多様なことを学べる魅力的な学部だということを意味しています。改組には様々な要因が絡んではいますが、今後、新しい国際学部がより魅力的な学部になるかどうかを左右するのは、何よりももっと国際学部を面白くするという教員の気合でしょう。皆さん、国際系の学部や学科がたくさん存在する中で、宇都宮大学国際学部の「らしさ」を追求していきましょう。7回に及んだ文部科学省との話し合いでは、国立大学唯一の国際学部として他の国際系の学部や学科をリードするような学部になってほしいという趣旨の発言が何度かあったと記憶していますが、これば、真面目に受け止めなければならない言葉です。皆さん、よろしくお願ひします・・・

6名のパネリストからは、それぞれの立場から大変刺激的なかつ参考になるメッセージが投げられました。ここでは、お名前だけ紹介させていただきます。宇都宮大学経営協議会委員・光陽電気工事株式会社社長の飯村慎一氏、横浜商業高等学校教諭八木澤和人氏、山梨英和大学准教授 李尚珍氏（国際学研究科修了生）、NPO 法人とちぎユースポータルネットワーク代表理事 岩井 俊宗氏（学部卒業生）、ジャードナパパン チッチャノックさん（国際学研究科1年生）、オルティスゆみこさん（国際社会学科4年生）。皆さん、パネリストとして発言頂き有難うございました。

そのあと、学生サークル・団体紹介のコーナーを設けました。ナムチャイ、カケハシーズ、リソースネットワーク、TFT (Table for Two)、HANDS Jr から紹介がありました。いずれもグローバルな視点や関心を持って精力的に活動していることが非常によく分かる

報告でした。「国際学部の学生は面白い」ことを実感する機会ともなりました。参加してくれた学生の皆さん、有難うございました。

その後の交流会には、引き続き多くの方に参加いただきました。北島滋・藤田和子・鯨井 佑士歴代学部長からは「ただいま」の言葉とともに学部や教員に対する熱いエールを頂きました。自分は解放感からか少々酔いが早く回ったので、失礼な発言があったとすれば、ご容赦くださいませ。

この場を借りて、ホームカミングデーの1週間前の11月13日に本学で宇都宮大学・福島大学・茨城大学主催シンポジウム「地域の課題に対して大学はどのように向き合うかー多文化共生と原発震災」が開催されたことを報告させていただきます。宇都宮大学国際学部・福島大学行政政策学類・茨城大学人文学部は、昨年度研究協定を結びまして、今回のシンポが共同研究の事実上の第一歩となります。第1部「多文化共生に向き合う地域」では、佐川泰弘（茨城大学人文学部長）、久我和己（福島大学行政政策学類長）と田巻が報告しました。第2部では、高橋若菜さんが「原発避難と創造的支援」と題する基調講演を行い、重田康博・清水奈名子さんがコメンテータとして発言されました。中村真さんには総合司会をしていただきました。

改組後の国際学部にも是非熱い応援をお願いいたします。最後になりましたが、学部長の任期は4年目の今年度で終了となります。来年4月からどのような形で学部に向き合うか、いろいろと思案中です。数か月残していますが、いろいろな人に支えていただきましたこと、この場を借りて御礼申し上げます。

（2016年12月11日原稿受理）

特別寄稿 2

「シンポジウム（新しい国際学部は何を目指すのか）」

高橋 豊

2016年11月19日の第4回ホームカミングデーに合わせ、来年4月に機構改組される国際学部についてシンポジウムが行われた。

田巻松雄・国際学部長は、学部創立20周年に刊行された『世界を見るための38講』にもとづき、国際学部の教育方針を説明する基調講演を行った。これを受け、7人のパネリストは、現国際学部の特色を明らかにし、今後への期待と注文を行うという大変刺激にみちた議論であった。

飯村慎一・宇都宮大学経営協議会委員は、経営者の立場から、学生に「チャレンジ精神」を求められた。さらに、多文化共生で優秀な学生を多く輩出している秋田の「国際教養大学」について述べた。唯一の外部参加の八木澤和人・横浜商業高等学校教諭は、在留3年以内の生徒への進路指導への難しさを語り、その生徒が国際学部に入学することの意義を語った。これに続き、OB・OGや現役学生からは、国際学部の「内側」から観察した立場で発言が続いた。

学部・大学院 1 期生の李尚珍・山梨英和大学准教授は、国際学部の成功の原因は、「教員と学生の情報の共有」にあり、この伝統を守って欲しいと述べた。

同じく OB である岩井俊宗・NPO 法人とちぎユースサポーターズネットワーク代表は、「地域活性化」に注力している国際学部の強みを強調された。

現役学生は、院生のジャードナパパン・チッチャノックさんは、タイからの留学生の立場と学生の目標設定の重要性を述べた。しんがりは、4 年生のオルティス・ゆみこさんで、日本生まれのペルー人として、自分たちを含め同胞の学生が小さい頃から両親の耳目として生活しながら進学を決めることの難しさを先ず話され、国際学部の入学の動機が「多文化共生」を目指す大学の「HANDS プロジェクト」の参画の意志で決めたと述べ、多くの聴衆の感動をよんだ。最後に、国際学部が国立大学で唯一「外国人枠」を有する真の国際化された学部と強調された。

私は、院生 1 期生として、国際社会研究、国際文化研究専攻の枠を超えて共に学ぶ姿勢を示してきたので、今度の改組が国際学部のさらなる飛躍につながると確信できたシンポジウムであった。

(国際学研究科 国際社会研究専攻 第 1 期修了生)

(2016 年 11 月 20 日原稿受理)

研究室訪問 46 第 9 号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第 46 号は寄稿者が未決定のため未掲載になります。

博士録 39 第 22 号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第 39 回目には田巻研究室 OG の**スバゴジョエワ アセリ**さんにお願ひしました。

「博士論文「進行アスペクトとテンスに関する日本語と キルギス語の対照研究」概要」

スバゴジョエワ アセリ

本論文では、言語の類型（例えば、SOV か SVO かの基本語順）から見て互いに類似している日本語とキルギス語に着目して、日本語の進行アスペクトを表す「～テイル」の観点からキルギス語のテンス・アスペクト形式の分析を試みました。アスペクトとは、主に動詞が表す進行か完了かなどの様態のことです。日本語のアスペクト研究は、スル・シテイルといった形態論的な対立に基づいてアスペクト的意味の対立を中心に研究が進められてきたのに対して、本論文は、キルギス語が補助動詞によって表される動作の局面に着目し、本動詞の語彙的アスペクトを中心に分析を行いました。具体的に日本語の進行アスペクト「～テイル」形式に対応するキルギス語の 4 つの補助動詞 V-(i)p jat-, V-(i)p tur-, V-(i)p otur-, V-(i)p jür-を研究対象として、その使い分けをはじめ、どのような文法的な意味を表すかについてテンス（現在か過去かの時制）の観点も含めて論じたもので、序章を入れて、

全部で5章からなります。以下に、各章の内容とその成果を概観したいと思います。

序章では、本論文における研究の背景、研究の対象、研究の目的と方法、キルギス語の文法的特徴と音声的特徴、本論文で扱う「補助動詞」及び本論文の構成について説明しました。研究の目的は、日本語の進行アスペクト「～テイル」形式に対応するキルギス語の文法形式及び補助動詞 V-(i)p jat-、V-(i)p tur-、V-(i)p otur-、V-(i)p jür-を実例に基づいて分析と考察し、それぞれの補助動詞の文法的な意味や使用される環境を考察し、進行アスペクト現象とそれに関連する事象を明らかにすることです。研究の方法として、言語使用の実体を把握するという必要性から、用例を収集し、分析するという方法を取りました。また、補助動詞とは、複合動詞の形式であって、本動詞によって表される意味を文法的な面から補助する形で用いられる動詞群のことです。

第1章では、まず一般言語学から見た動詞のアスペクト・テンスについて確認し、ロシア語における「アスペクト」と「体」のうち主にロシア語の不完了体の文法的な意味を紹介しました。第2節では日本語のアスペクト研究の現状と日本語の基本的なアスペクト体系を明確にした後に、文法的アスペクトの研究として工藤(1995)、語彙的アスペクトの研究として金田一(1950)と奥田(1977)を取り上げ、「～テイル」と運動動詞の相関関係を中心に述べました。第3節では、キルギス語のアスペクト的な補助動詞に関わる諸記述をし、V-(i)p jat-、V-(i)p tur-、V-(i)p otur-、V-(i)p jür-形式のそれぞれの本動詞としての意味について考察した後に、V-(i)p jat-、V-(i)p tur-、V-(i)p otur-、V-(i)p jür-に関する先行研究の問題点を指摘しました。

第2章では、基本的に主節に現れるキルギス語の補助動詞を言語資料に基づき V-(i)p jat-、V-(i)p tur-、V-(i)p otur-、V-(i)p jür-形式の場合に生じるそれぞれの文法的な意味について考察しました。考察に当たり、本動詞の語彙的な意味に基づいた分類として動作動詞、変化動詞、状態動詞、内的感情動詞という4つの分類に従い、分析した。第2章の内容は概ね4つの部分からなります。第1節では、動詞の分類ごとに V-(i)p jat 形式の動作動詞、変化動詞、状態動詞、内的感情動詞の場合に生じる文法的な意味について考察しました。第2節では、同一の分類法で V-(i)p tur-形式の場合について考察し、さらに同一の分類法を用いて第3節では V-(i)p otur-形式について、第4節では V-(i)p jür-形式についてそれぞれ考察しました。

第3章では、日本語の従属節を出発点にして、キルギス語の従属節のテンス・アスペクトの形式を比較対照しました。第1節では、日本語の従属節のテンス・アスペクトについて概観し、日本語とキルギス語の従属節の持つアスペクト的特徴について分析を試みました。第2節では、日本語とキルギス語の従属節のテンス・アスペクトの比較対照を日本語のトキ(ニ)節と共起する主節のテンス・アスペクトを「ル」形と「タ」形、「テイル」形と「テイタ」形の4種類に分けて考察しました。本研究の対象である4つの補助動詞は、主節の述語に来る場合と同様に従属節にも現れ、「-(i)p jat-kanda、-(i)p tur-ganda、-(i)p otur-ganda、-(i)p jür-göndö」の各従属節について、比較対照を行いました。さらに、第3節

では、共起的時間関係を表すアイダ（ニ）節を中心に、第 4 節では、継起的時間関係を表すマエ（ニ）節、アト（デ）節を中心に比較対照を行いました。

最後に第 4 章では、この論文の各章で論じた日本語とキルギス語の進行アスペクトについてまとめ、また、本論文の成果を示した上で、「～テイタ」を新たな研究対象とするなどの今後の課題を述べました。

博士論文を書き終えて

私は 2010 年 4 月から 2016 年 9 月 30 日まで宇都宮大学に留学し、6 年半もの間、本大学の皆様には大変お世話になりました。

博士論文研究は佐々木一隆先生のご指導のもとで完成させることができました。研究と生活の両面で大きく悩み、本当に苦しくて 3 年目の後半に博士後期課程から脱落しそうになっていたところ、田巻先生と佐々木先生にはご理解とご指導をいただいたお陰で、今こうして「知求会ニュース」に宇大での留学成果をまとめることができるようになりました。佐々木先生は指導の中でいつも研究仲間として受け入れてくださり、根気強くご指導をしていただき、本物の学者としての姿勢をはじめ多くのことを学ばせていただきました。この場を借りて佐々木先生に心から感謝を申し上げます。

共に学んだ留学生や日本人の方と出会えたこと、先生方からいただいた様々な知識や助言は、人生の中で最も素晴らしい収穫となり、掛け替えのない経験になりました。2016 年の 2 月に予備論文を提出した後の 4 月に第二子として娘が生まれました。育児の手伝いのために母親が来日してくれたので、本論文の修正作業が進められました。今思うと、とても大変でしたが、指導教員の先生方、特に田巻先生と佐々木先生には本論文の大枠と詳細の双方でご指導をしてくださったので本論文を完成することができました。

私は宇大に留学した当初「博士論文の執筆は、研究者としての最終到達点ではなく、通過点です。」ということを言われました。その通りであると現在強く感じています。博士論文の執筆は自分の研究手法を身につけたり、独自の観点を見つけたりする良いチャンスであるため、成功させれば、自分の研究課題と関連する色々な問題についてよく知っていると期待されるからです。

以下では私がこの「通過点」で苦労した点や特に重要だと実感した点をお伝えしたいと思います。博士後期課程は 3 年間あり、余裕があると思いがちですが、しっかりとした研究計画と年間スケジュールを立てないと時間はあっという間に経ってしまいます。つまり、研究テーマを設定してから 2 年半ぐらいで完成できる研究テーマを掲げ、先行研究の情報収集や使用方法をはじめとして学会発表、投稿論文の掲載の時期、博士論文の執筆開始、体裁を整える作業などのすべてを後期課程の受験を決めた段階から立案しておくことが重要です。たとえ頭をあまり使わない作業である体裁を整えることにも時間を費やせねばならなくなりますが、執筆中の早い段階から気分転換にこの作業をしておけば、かなりの時間が節約できます。そして節約して余裕が出た時間を論証の精度を高めたり、研究成

果をまとめたりすることに費やせば無駄をせずに済みます。本当に時間は短く、特に留学生は思いも寄らないことが生じる可能性があり、精神的な面にも十分留意して常に余裕を持って作業を進める方が良いと思います。以上が基本的なことかもしれませんが、うまく調整できなかった私がとても苦労した点です。

とは言うものの、本学は本気で研究者を目指して朝から夕方まで研究室にて自分のスタイルに合った研究活動ができて良い環境でした。一人の時間が長いということですが、私は院生同士が行なっている研究にも目を向け、意見交換して、コミュニケーションや議論することで自分が成長していくことを実感しました。分野が異なるからこそ勉強になるので、お互いの研究にも協力し合いましょう。

最後になりますが、宇都宮大学大学院国際学研究科の益々のご発展を祈って、本文の末尾とさせていただきます。

(国際学研究科 国際学研究専攻 第7期修了生)

(2016年10月22日原稿受理)

知究人 31 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。今回は、田口研究室 OG の橋本恵里さんをお願いしました。

「美術の世界へ飛び込んで」

橋本 恵里

宇都宮大学国際学部国際文化学科卒業生の橋本恵里です。大学へ進学した時には、6年後自分が現在のような状況に身を置いているだろうとは予想していませんでした。海外の文化・社会をもっと知りたい!という今から思えば漠然とした動機と、福島県出身の自身にとって栃木県は距離的にも親近性を感じていたために宇都宮大学への進学を決めました。

現在、私は神戸大学大学院人文学研究科に籍を置いており、美術史を専攻しています。しかし、美術の道に進もうと決心したのは学部3年生の頃で、表象文化論などの授業で特にフランス近代絵画に興味を持ったのがきっかけでした。卒業論文準備演習以降はフランス文化論のゼミに所属し、卒論では美術史で素朴派というジャンルに分類される画家アンリ・ルソー(1844-1910)の作品について論じました。3年次以降は決意した現在の進路に進むために、美術史を一から学び、卒論の執筆に勤しみ、もともと第二言語ではなかったフランス語の学習を始めだし、精神的に追い込まれながらも充実した日々を送ることができました。指導してくださった田口卓臣先生と出羽尚先生には本当に頭が上がりません。

卒論で扱った画家アンリ・ルソーについては、継続して研究を続けており修士論文の執筆に取り組んでおります。大学院まで進んだのは、美術をもっと勉強したいという思いからであるのは勿論ですが、将来的に美術館の学芸員になることを目指しているためです。一つのポストが空かない限り募集がかからない職種であるので、就職が難しい職業である

ことは、学部生の時からぼんやりとした情報で分かってはいたのですが、修士課程に進んでからより一層身に染みて感じるようになりました。夢に近づくために必要な自身のキャリア形成のために、来年度からフランスへの留学を予定として考えております。その計画の都合から現在は休学中ですが、同時に兵庫県立美術館の臨時職員として勤務させていただいております。仕事は主に事務と学芸員のアシスタントのような内容です。半年間という短い採用期間ではありますが、この間に現場で仕事に携わることができ、目指している職業のやり甲斐や大変さを日々目の当たりにして、多くのことを学んでいます。

これまで人と人との縁とタイミングによって、時には予定になかった方向へ、事態が展開してきましたが、目標に向かって着実に一歩ずつ前に進めていることは確かです。

(国際学部 国際文化学科 第17期卒業生)

(2016年12月12日原稿受理)

海外だより 24 第27号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

海外留学今昔 19 第35号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外留学経験者**および**海外留学中の在学者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

「アメリカ留学体験記」

国際学部国際文化学科4年 穂高 衣美香

私は、2015年8月から2016年5月まで約10か月間、アメリカ・インディアナ州にあるトライン大学に留学しました。トライン大学は、湖で有名な小さな町アンゴラにあり、私の留学中には、あのジャスティン・ビーバーもお忍びで訪れるほど美しい湖がたくさんあります。トライン大学は、そこまで規模は大きくないものの、施設や寮が充実しているため、割と快適に過ごすことが出来ました。私は、トライン大学では語学学校に通いながら、アメリカ人三人のルームメイトと生活していました。

今でこそ、良い思い出である留学生活ですが、勿論楽しいことばかりではなく、何度も何度も日本に帰りたと思いました。初めてトライン大学に着いた日のことは今でも忘れません。何もかもが新しく、英語でのコミュニケーション、一からの人間関係の構築、甘くて塩辛い食べ物、何もかもがストレスで本当に塞ぎ込みそうになりました。しかし限られた留学生活、自分から環境を変えていかねばと自分に言い聞かせ、キャンパス内のイベントに赴いたり、拙い英語で話しかけたり、新しい環境になるべく早く溶け込めるよう努めました。ようやくアメリカでの生活に慣れ始めたのは秋の終わり頃でした。語学学校での日々の学習のおかげもあってか、英語は少しずつ聞き取れるようになり、友達も増え、その頃には楽しんで留学生活を送っていたと思います。その後、冬休みを迎え、クリスマ

スから正月明けまでフロリダのディズニーワールドで過ごし、春期が始まるまでをアリゾナにいるホストファミリーの家で過ごし、トライン大学へ戻りました。1月から帰国までの5月の間は、本当にあっという間に過ぎてしまいました。

10か月間という短い期間ではありましたが、私はこの留学生活の中でかけがえのない大切なものを数多く手に入れることが出来ました。最高のルームメイトに、最高の友人達、一生の友とも言えるほどの親友、これまでの自分を変えるような体験や出会い、この留学を通して得たものは数え切れません。当初、留学先の志望はアメリカではなかったものの、トライン大学に留学させて頂くことが出来て本当に良かったと思っています。

今、帰国してもうすぐ4か月が経とうとしています。トライン大学では、秋期が始まり、新しい日本人留学生が派遣されています。私が、トライン大学に派遣された日からもう一年が経つのかと思うと、月日の流れの速さを感じるとともに、トライン大学での生活を恋しく思います。今後、私は米山先生の研究室に入り、アメリカ文化について研究を深める予定です。留学先で学んだことを活かせることが出来たら良いと思っています。まだまだ、書き足りないところではありますが、この記事を読んでくださった皆さまに、私のアメリカ留学生活を少しでも感じていただけたら幸いです。最後に、この留学に際して支えて下さった、国際交流課の皆さま、友人、そして家族に感謝の意を伝えたいと思います。本当にありがとうございました。

(国際学部 国際文化学科 第4年次在学学生)

(2016年08月25日原稿受理)

「アメリカ留学体験記」

国際学部国際社会学科4年 市川 香菜子

今振り返ると、私の留学は衝動的なものだったように思います。長年、海外への憧れを募らせていましたが、なかなか思い切ることができず、すでに大学生活の終わりが見え始めていました。はっきりとした目標も持たずに就職活動を始めようとした矢先、Nico & Vinzの“Am I Wrong”という曲を耳にし、かつてないほど強く心をつかまれ、外に出て何かに挑戦したいという思いが沸き上がってきました。それから急いで留学先の調査をし、TOEICの点数をあげ、ぎりぎりになって志望動機等をまとめた書類を提出しました。

交換留学生に選ばれたときは嬉しかったですが、一度も海外に行ったことがなかったのが不安もありました。実際、アメリカに降り立ったその日から困難の連続だったように思います。アメリカは意見を口にすることを非常に重視する社会で、日本でなじみのある「察しあい」のようなものは通用しません。自分の言いたいことをなかなか言葉にできず、曖昧な笑みでごまかしてしまうことが何度もありました。

それは日常会話に限らず、授業でも同じです。英語学校では、担当の先生がゆっくり話してくれたこともあり、内容を聞き逃すということはありませんでした。しかし、並行して受けていた「異文化コミュニケーション」では、ある人の発言を理解しようとしている

うちに他の人が話し始めたり、先生が専門用語の解説に移ったりするため、厳しい日々が続きました。また、日本の社会や文化について問われることが多く、自国についてうまく説明できないことにもどかしさを感じました。しかし、どの授業も充実したものばかりで、後期に受講した「文学入門」や「翻訳」は自分を変えるきっかけになりました。そのおかげで、英文学をより専門的に学びたいという思いが強くなり、現在、他大学の大学院を目指して勉強しています。授業で議論に参加したことや多様な文学作品の考察を繰り返したことが刺激となり、卒業論文のテーマや将来の方向性を定めることができたのはよかったです。留学は決して楽しいだけのものではありませんでしたが、自分が本当にやりたいことを見つけられたような気がします。

最後になりますが、留学について助言をくださった宇都宮大学およびトリン大学の方々に感謝申し上げます。この体験記が、将来に悩んでいる学生の助けになれば幸いです。

(国際学部 国際社会学科 第4年次在学学生)

(2016年09月13日原稿受理)

学生サロン 10 知求会ニュース第41号より現役学部生によるコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**現役学部生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

「ハラール研究会」

今成 麻友

こんにちは、宇都宮大学国際学部国際文化学科4年の今成麻友と申します。今回は、宇都宮大学を拠点として活動する「ハラール研究会」について紹介いたします。

2015年に設立された「ハラール研究会」。会長の友松篤信名誉教授を中心として、イスラム教徒(ムスリム)の皆さんが日本で快適に生活できる生活環境を構築するために、様々な取り組みをしています。宇都宮大学や院生、ムスリムの留学生や教職員、自治体の職員の皆さんなど、多岐に亘る分野の方々と協力してプロジェクトを実施しています。2015年10月には、陽東キャンパス学生食堂にハラール推奨メニューの牛丼とチキン竜田丼の導入、同年12月には鬼怒川温泉大原のテーマパーク「東武ワールドスクウェア」に、ムスリム観光客を対象とする礼拝施設の設計に協力しました。

本年9月9日には峰キャンパスの生協食堂にて、ハラール専門の食品卸商社と生協の皆さんの協力の下、ハラール食品の試食会を実施しました。生協の店舗にハラール専用のコーナーを置き、ムスリムの留学生が利用できる食品を提供するためです。生協食堂の机の上におよそ50品目のハラール食品や飲料を並べ試食し、ムスリムと日本人の学生両者に受け入れられる味かどうかを検討しました。インドネシアからの輸入品でありながら日本人の学生も好みそうな風味のせんべいやジュース、カップヌードルなど、ムスリムの人々が安心して楽しめるハラール食品がそろいました。私自身、ハラール認証された食品を一

度に試す機会は初めてで、かつムスリムから人気の味や日本でめったに購入できない商品について意見を聞くことができました。

ハラール研究会では、イスラム対応をすると同時に、日本人のイスラム教やハラールについての相互理解を深めるために活動しています。私も2015年秋に加入して以来、より敏感に宗教へ関心が向くようになりました。訪日外国人が「日本は快適な国だ」と口にする姿を幾度となく目にしてきました。私自身も、日本の充実した住環境や丁寧なサービスを誇りに思うことがあります。ただ、ムスリムにとっては、日本にはまだ安心して生活を送るには未対応の部分が見られます。今回の活動で、イスラム教徒が不安を払拭して日本での食事を可能にする環境形成の第一歩に貢献できればと考えています。

(国際学部 国際文化学科 第4年次在学)

(2016年09月13日原稿受理)

キャリア指南12 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPOや企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**キャリア指南にふさわしい卒業生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

フォーラム 2016年の師走を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦労しています。)今回は第4回ホームカミングデー特集号のためにお休みです。

EU支部だより

第38号からイタリア在住の**松原真実子**さんによる知求会EU支部だより「Newsreel World」を発行してきました。今回の20号の内容は、1 イタリア 神父、地震は「同性カップルの権利認められた罰」 2 EU支部だより ー奈良県 明日香村ーです。配信方法は、画像が掲載されているために別便で配信します。ファイル容量が大きいことで、ニュースレターが受信できない場合にはその状況をお知らせください。

さて、知求会ニュースも、**無事15年目を配信することができました。これまでの原稿執筆者の皆様、本当にありがとうございます。Season's Greetings! 皆様、よいお年をお迎え下さい。**

編集後記：2010年4月26日から **知求会ニュースのバックナンバー**は **国際学部同窓会 HP** (<http://www.afis.jp>) で見られるようになっています。

同窓会会員の皆様へのお願い：**住所、勤務先および携帯電話番号、メールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。** chikyukai@freeml.com
